

## 〔乾山と木米—陶磁と絵画—展によせて〕

## 乾山作品の意匠構成と嵯峨本

尾形乾山は晩年に江戸に下り、寛保三年（一七四三）に江戸の地で八十一歳の高齢で亡くなりました。江戸では、寛永寺領の入谷で乾山窯を開いたと伝えられますが、晩年の乾山については、明らかではありません。『古画備考』に晩年の乾山に関する文政九年（一八二六）、九月十四日の観嵩月の談話が収められています。乾山は深川六軒堀にある坂本米舟の長屋で、独りで暮らしながら陶器を制作しており、時折、公寛法親王に召され、黒羽二重の小袖や下着を拝領したと記されています。坂本米舟は筑島屋という材木商を営んでいました。観崇月は当時の筑島屋の主人であり、絵師、英一蜂の門人でした。崇月は天保元年（一八三〇）に七十歳で亡くなっていますので、乾山は祖父、あるいは曾祖父の代の人になります。この後、文政五年（一八二二）に乾山の子孫と称する植木屋の手代の鋏という人物が訪れ、母方が乾山の薬法と掛物を所持していると述べたことが報告されています。この薬法とは乾山焼の陶法を記した伝書、掛物とは乾山自筆の書画と思われる。

現在、落款に「八十一歳」と記された乾山の絵画作品が数点残され、乾山は最後まで制作を続けていたことがわかります。「武蔵野隅田川図乱箱」（図1）もその一つです。このように蓋のない浅い箱を乱箱と呼びます。乾山は四隅を撫でるように丸く整えた桐の乱箱の全面を飾っています。見込みには、墨で蛇籠と波頭、金泥で千鳥を描いています。蛇籠は竹や木の枝を粗く編んだ籠であり、護岸のために川に沈めて用います。趣のある風情から、片輪車と同様に流水と組み合わせられる王朝趣味の意匠です。この作品におい

ても、素直な線描を交差させる瑞々しい蛇籠は、流れるような曲線で描かれた柔らかな波頭と対照されています。蛇籠と波頭では、墨色が微妙に相違します。側面と裏面には、薄を全面に散らしています。薄の穂は白と臙脂、茎と葉、下草は墨と緑青に金泥を交えて華やかに彩り、弧線の重なりは画面に空間的な広がりを与えています。

「武蔵野隅田川図乱箱」の優美な形状と立体的な意匠構成は、乾山焼の「白泥染付金彩芒文蓋物」（サントリ美術館蔵・図2）、「白泥染付金彩松波文蓋物」（出光美術館蔵・図3）を思わせます。特に、「白泥染付金彩芒文蓋物」は方形の形や大きさともほぼ同じです。この二作品では、蓋と身の外側は粗い陶土の素朴な質感を活かし、内側は白土を化粧掛けしています。「白泥染付金彩芒文蓋物」の外側には、薄と下草を白土と呉須で二重に描いて金泥を加え、内側には模様を呉須で描き、まるで布を貼ったように見えています。「白泥染付金彩松波文蓋物」では、外側には、白土、呉須、金泥、銀泥で松林を描き、内側は呉須と金泥で波を描いています。外側と内側を合わせれば、波打ち際の松林になります。大胆で力強い意匠構成ですが、この二作品はいずれも嵯峨本の料紙の意匠を踏襲しています。「白泥染付金彩芒文蓋物」の外側は嵯峨本の「立薄」（図4）、内側は「唐草十字印摺文」（図5）、「白泥染付金彩松波文蓋物」では「松林に波」（図6）の一つの図様を外側と内側に分けています。「武蔵野隅田川図乱箱」では、外側は「白泥染付金彩芒文蓋物」と同様に「立薄」（図4）、見込には「蛇籠に波」（図7）が挙げられます。この他にも、「色絵竜田

川文向付」（大和文華館他蔵）、「鏝絵染付金彩絵替土器皿」（根津美術館蔵）など、乾山焼には嵯峨本の料紙を思わせる意匠の作品が数多く見いだせます。

嵯峨本は慶長年間（一五九六～一六一五）に制作された古活字本です。文字の版下を本阿弥光悦が描き、豪商、角倉素庵の経済的な援助によって刊行されたと伝えられることから、光悦本、角倉本と呼ばれます。嵯峨本の名は角倉家の本拠地が嵯峨であったことに由来します。嵯峨本のことを記す最初の重要な文献は、中村富平が編集した『弁疑書目録』です。三卷本の中巻に次のような嵯峨本の記載があります。「嵯峨本の書目 読本 観世流 百番本 此の書を以て角倉本と云い、或は光悦本の謄とも云うなり。本紙に雲母を引き、五色摺の書と常紙摺の書の二品あり。又素紙に染色多し。即ち雲母を以て草花鳥獸虫の模様を摺込。此書を以て或は数寄者は床の飾り本にすることなり。」この後、『伊勢物語』をはじめ、十四種を挙げ、最後に「総て嵯峨本と云うは雲母にて模様あるを以て正とす。この類書に角倉素庵の自筆の印本すくならず。此版今に嵯峨の角の倉にあり」とまとめています。嵯峨本の最も重要な特色は、木版で摺りだした雲母の模様であったことがわかります。

『弁疑書目録』が公刊されたのは、宝永七年（一七〇一）です。嵯峨本が刊行されてから、百年以上が過ぎっていますが、少なくとも、当時の嵯峨本の一般的な認識を知ることができます。この年に、尾形光琳は五十三歳、乾山は四十八歳です。光琳は江戸からどり、翌年の正徳元年（一七一）に二条新町に屋敷を新築し、乾山は正徳二年（一七一）に乾山窯を鳴滝泉谷から市中の二条丁子屋町へ移転しています。ようやく、光琳と乾山

が揃い、乾山窯での兄弟の合作が可能になった時期と言えます。二人の曾祖父、道柏の妻は本阿弥光悦の女兄弟の法秀であり、尾形家と本阿弥家は遠縁にあたります。光悦が鷹峯に開いた光悦村には、祖父、宗柏が屋敷を構えており、乾山は父、宗謙から鷹峯の屋敷を譲り受けていました。二人は光悦が携わったと伝えられる嵯峨本に特別な関心を持っていたにちがいない。（中部義隆）（図2・3は『乾山と木米—陶磁と絵画—』展図録2011年大和文華館発行、図4～7は江島伊兵衛・表章編『図説光悦謄本』1970年有秀堂発行より複写しました。）

図4

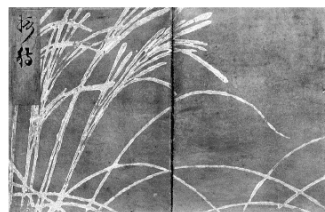


図5

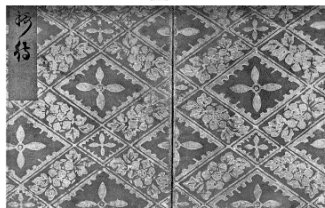


図6

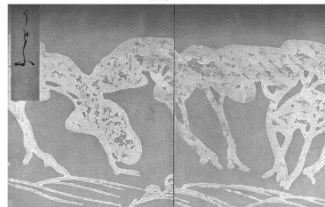


図7



図1

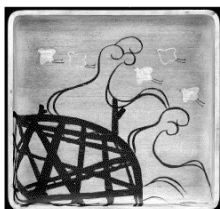


図2

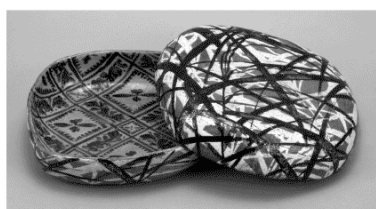


図3

